報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

2018年　6月　1日

関西学院大学 学長殿

所属：神学部
職名：准教授
氏名：柳澤田実

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	■特別研究期間　□自由研究期間 □大学共同研究　□個人特別研究費 □博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	20世紀後半以降のフランス･イタリア現代思想とキリスト教思想との接点、また両者の実践可能性を検討する
研究実施場所	自宅、東京大学（本郷キャンパス）およびThe New School for Social Research(NYC,USA)
研究期間	2017年　4月　1日　～　2018年　3月　31日（　12　ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

フランス・イタリア現代思想とキリスト教の問題を考えるにあたり、中心的なテーマとなっているのは「犠牲（sacrifice）」、特に宗教的信条が動機となる極端な利他主義、「自己犠牲」の問題であり、これまでジャック・デリダやジョルジュ・アガンベン、日本のデリダ研究者・高橋哲哉らによって議論されてきた。報告者はこの問題に関する先行研究を整理した上で、議論を進展させるためには、同様のテーマに関する研究を実証的方法によって積極的に進展させている欧米の人類学と社会心理学による研究を正確に理解する必要を痛感した。欧米では2010年前後から、心理学、人類学、哲学、宗教学を横断する形で、実証的方法による宗教研究、特に人間の道徳性の進化と宗教との関係を巡る研究が活発に展開しており、その中でも人間が自らの信念や共同体のために行う極端な利他主義／自己犠牲は「聖なる価値sacred values」やidentity fusionというテーマのもとに扱われている。

現代思想や哲学など人文科学で積み重ねられてきた議論をさらに深化させるためには、上述の実証研究の成果を把握し、総合していく必要があると報告者は考える。そこで、2017年度の４月から１２月の期間、東京大学文学部社会心理学研究室の学部授業に参加することとし、講義、実習などを通じて、社会心理学の手法を用いた道徳研究の基礎を学んだ。特に亀田達也教授からは、分配ゲーム、社会的ジレンマの問題、そして各共同体が共有する倫理をグループの生存戦略という観点から合理的ロジックとして読み解く進化論的アプローチについて多くを教えられた。

続く１月以降から年度末までは、「聖なる価値」研究を牽引しているJeremy Ginges教授が所属するThe New School for Social Research（NYC、USA）の大学院、心理学部に留学し、コースワークに参加すると共に、自身の研究についての具体的な相談を行った。Gingesの演習では、道徳性の進化と宗教に関する最新の主要論文（Whitehouse、Norenzayan、Purzycki、Henrichらによる）を毎週読み、議論を行うとともに、ラボの研究員たちの「聖なる価値」研究の成果を巡って討論した。これらの論文の調査と議論によって理解されたのは、⑴先行研究の主たるものは、人間の道徳性の進化に制度としての宗教、特にアブラハム的伝統を持つ世界宗教が大きな役割を果たしたという前提を共有していること、⑵人間の道徳性の進化として想定されているのは、人々が内集団ひいき（しばしば偏狭な利他主義parochial altruismと呼ばれる）を乗り越え、見ず知らずの人を受け入れていくプロセスであること、⑶世界宗教以前の土着的な宗教や共同体の儀式は、内集団ひいきのロジックを強化するものであり、集団のための自己犠牲はこの範疇で捉えられているということ、⑷Whitehouse(Oxford University)のグループは、この集団のための自己犠牲をidentity fusion theoryで根拠づけているということ、⑸Norenzayan（The University of British Columbia）のグループは、制度としての宗教の役割は近代以降、司法、警察、市場など他の制度に取って代わられたと考えているということである。報告者は、⑷と⑸に関して疑問を感じ、⑷については方法的に妥当ではないと考えるとともに（この問題については日本の特攻を例に具体的な反論を演習内で提示した）、⑸については宗教と他の制度との異同を明確にすべきだと考えるに至り、これを今後の自身の課題とすることとした。

以上においてまとめられた先行研究においては、自己犠牲は偏狭な利他主義の例として扱われるに留まっており、世界宗教に（理想やスローガンとしてであれ）掲げられている「人類」や「平和」といった特定の集団の利益を超えた自己犠牲については十分に扱われているとは言い難い。私見では、いずれの共同体の倫理も、決して内集団ひいきの共同体倫理のみ、あるいは世界宗教のみからなる一枚岩でありえない。土着的な宗教／「聖なる価値」、世界宗教、さらには他の諸制度との相関的な関係を見なければ、同じアブラハム的伝統の共同体において、一方で自爆テロが横行し、他方で貧しい人への慈善行為が実践されている状況は理解できないように思われる。また世界宗教、少なくともアブラハム的宗教の影響が希薄であるが、市場的統合が高度に進んでいる日本の状況を考える上でも、倫理を促進する複数の要素の相関を検討することこそが重要であると報告者は考えるに至った。プロテスタンティズムが市場経済を促進したことを指摘したM.ウェーバーの研究は余りにも有名だが、こうした過去の研究の成果も再検討しつつ、内集団ひいきの倫理（「聖なる価値」）、世界宗教、市場経済の相関を丁寧に検討することが肝要であろう。Ginges教授にもこうした問題関心に基づく研究計画についてプレゼンテーションを行ったところ、ぜひ進めるようにとの後押しを頂き、帰国した。

現在、上述の計画に基づき、まずはテキストベースの研究を進めている。演習でも取り上げられたHenrichの論文、‘Market, Religion, Community Size and the Evolution of the Fairness and Punishment’(2001)はこうした問題設定で研究を行う上で、複数のコミュニティにおける、平等への志向と世界宗教および市場による統合の相関を測定している先行研究として大いに参考になるため、この論文のデータも含めた内容を精査している。この成果は2018年度の土井道子記念京都哲学基金シンポジウムでの招聘講演、日本宗教学会および日本人間行動進化学会の年次大会などで発表され、英語論文としてまとめられ、*Journal of Cognition and Culture*(Brill)などのしかるべき学術雑誌に投稿される予定である。

以上提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。